



理事会の開催

三月一日、鞍掛山麓千枚田保存会理事会を久々に開催した。

コロナウイルス感染症を危惧し、理事会、年次総会は書面決議で進めてきたが、意思疎通を円滑に進め、信頼関係を深めるためにも久々であるが対面会議としたことなどを会長の挨拶として会議を進行した。

松下 誠会計から保存会事業活動の進捗状況として・景観環境整備・環境学習体験学習等・千枚田イベント・その他の活動関係(千枚田以外も含む)の報告。続いて会計の収支実績及び見込みについて報告(項別別の説明)が成された。

その他として、作業道の陥没箇所の補修、ベンチの補修整備等について議論し、実施の方向となった。

令和のコメ騒動

最近、スーパーに行ってもコメの品薄が続いて買えないといった状況が続いており、やっと買えたと思っても数量制限などとコメを十分に確保するのが難しい状況となっている。

昨年は全国各地で総雨量1000mmを超える大雨と記録的な夏の暑さによる高温障害(コメの内部に亀裂が生じてしまう「胴割れ粒」や

でんぷんの形成が悪く白く濁ったように見える「乳白粒」などが生じる)を起こして等級が下がり、出荷米が不足。主産地の新潟においては8月の降水量が少なく、水不足が追い打ちをかけたと言われていることや、インバウンド(訪日外国人観光客)などにより消費が増加していることが原因に挙げられている。

より根本的な問題は、政府は需要の減少を理由に毎年十万吨の減収政策を施行。予想される需要ギリギリの生産しかしていないことにある。このため、わずかな需給の変動によつて、今回のような大雨と高温による供給不足事態を招いたと思う。「農水省の「米穀の取引に関する報告」によれば、平成十五年々平成二十八年までのコメの需要量の減少幅は年間で八万吨程度であったが、平成二十九年以降は年間十

万トン程度の減少で推移している」価格高騰の決定打となったのは、気象庁による昨年八月八日の南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)発表と、お盆前後の台風被害の頻発である。これらの報道をきっかけに、買いだめと店頭での品切れの連鎖が始まり、コメ価格が急上昇。秋以降、新米が出回れば価格は安定する

かと思われたが、玄米六十kgの相場は八月の二万八千七百十円(前年七月は一万五千六百二十六円)、九月三万二千八百五十円、十月三万七千八百二十円、十一月三万九千八百五十円、十二月は四万八千八百十円と米価がインフレ傾向にある。巷では白米五kg四千円もすると、買いだめに必死こいているようだ。そうそう、我が家の嫁に行つた娘も孫も爺ちゃん、ばあちゃん…と急に優しくなつたような気がしてならない。

仮設トイレ四方山話

二月二十四日、仮設トイレに設置してある協力金瓶を久々に回収。かつてない浄財の多さにビックリ。また、協力金投入者の配慮か?一円玉の少ないのにも驚いた。(写真)

過去を辿ると令和四年八月十八日に瓶に入った協力金八百三十円を回収したものの硬貨が青さびしているため、硬貨を洗い、台の上に干して置いたら親切な観光客さんを持っていかれてしまった。その後日々の管理においてもあまり協力していただいた形跡はなく、昨年のお田植え感謝の夕べの翌日(六月二日)に、なんと千円札が入っていた。盗られてしまったのはドロボーさんの養成所になつてしまふ、と回収(千八百三十円)したものの、瓶の上部が割れていた。(※写真破損部分)

この実態を明智小五郎もどきに推理すると、皆さんの仮設トイレ使用浄財は常に協力していただいていたものの、回収金が多すぎたこと、利用者者を疑つていたことを心からお詫びいたします。というのは、過去に概ね二千元くらいは貯まつたか?と思つた頃に、必ず消えてしまつている。盗難防止にチェーンを掛けてもカッターでチェーンを切断してまでも、協力金箱を重くしても、どうやって持つて行つたか無くなつてしまふ。トイレに防犯カメラを設置などと、こちらが変質者扱いに噂されてしまふし……



今回、思わぬ多くの方々から浄財を頂きました。日々、仮設トイレを管理するものとして大変嬉しくもあり、励みにもなります。今後も皆さんに、少しでも快適にご利用いただけるように掃除、管理を続ける所存です。

なお、皆さんからの浄財協力金は保存会活動資金として保存継承に利活用させていただきます。

【寄稿】 四谷の千枚田を未来へつなぐ ハッピーランドプロジェクトの挑戦

ハッピーランドプロジェクト代表 丸地典利

～四谷の千枚田—日本の原風景が消えゆく危機～

愛知県新城市に広がる「四谷の千枚田」は、四季折々に美しい風景を見せる、日本の誇る原風景のひとつです。石積みの棚田が織りなす景観は、「日本の棚田百選」に選ばれ、多くの人々を魅了してきました。しかし、その美しさの裏で、深刻な課題が進行しています。棚田を支える耕作者の高齢化と後継者不足が進み、このままでは十数年以内に四谷の千枚田は消滅してしまうかもしれません。この状況に歯止めをかけ、ふるさとの風景を守るために立ち上がったのがハッピーランドプロジェクトです。

～「パディーキーパー」とともに未来を耕す～

2016年、私は「ハッピーランドプロジェクト」を発足。翌2017年には、都市部の家族や企業が棚田の保全活動に関わることができる「棚田オーナー制度」を開始しました。参加者は「パディーキーパー (Paddy Keeper)」と呼ばれ、棚田を守る担い手となっています。活動初年度には、休耕田6枚(約1200㎡)を5チーム42名で耕作開始。2020年には9チーム76名、約2400㎡へと拡大しました。そして今では「週末だけでも棚田のある暮らしを楽しみたい」というパディーキーパーが増え、地域とのつながりが深まっています。

～農と酒がつなぐ、地域再生の力—zero 酒プロジェクト～

2021年、新たな挑戦として「zero 酒プロジェクト」を開始しました。「遊ぶように農をし、愛する酒を醸す」ことをテーマに、仲間たちが力を合わせ、地域を元気にする試みです。2022年には休耕田2枚(約300㎡)を復元し、耕作面積を約3000㎡に拡大。2023年にはさらに7枚(約700㎡)を追加し、約3700㎡(約1100坪)まで広がりました。農業と酒造りを融合させることで、単なる景観保全にとどまらず、新たな地域活性化の形が生まれつつあります。

～棚DX—デジタルの力で伝統を未来へ～

ハッピーランドプロジェクトは、デジタル技術を活用した「棚DX」にも積極的に取り組んでいます。IoTを活用し、棚田の水管理を遠隔で行い、獣害対策として監視カメラを導入するなど、持続可能な棚田のあり方を模索。テクノロジーの力で、農業の負担を軽減し、次世代へ受け継ぐ仕組みを築いています。この取り組みには、(株)デンソーの「デンソーグループはあとふる基金」の支援を受け、最先端技術を活用しながら、棚田の未来を切り拓いています。

～全国へ広がる共感の輪～

ハッピーランドプロジェクトの活動は、新城市にとどまらず、愛知県全体、さらには日本全国へと広がりつつあります。SNS (Instagram、Facebook) を活用し、活動の様子を発信することで、多くの人々が棚田の未来に関心を寄せています。棚田はただの農地ではなく、日本の原風景であり、そこに刻まれた文化や暮らしの証です。これからも四谷の千枚田を未来につなげるため、私たちは全国の仲間と共に歩み続けます。

四谷の千枚田の未来は、私たち一人ひとりの手にかかっています。この美しい風景を次世代に残すために、あなたも「パディーキーパー」として、この活動に参加してみませんか？



発行

令和七年三月十五日
文責 鞍掛山麓千枚田保存会
小山舜二



愛知県広報誌
あいちのトビラ 2025
愛知県には、世界最先端の産業を始め、伝統文化や美しい風景、豊かな食文化など、様々な魅力がある。そうした愛知の魅力を国内外の方々に知っていただくため、愛知のイメージアップを図るため、県では、広報誌・広報動画「あいちのトビラ」(日本語版・中国語版・英語版)を毎年発行・発信している。
その中の「自然と暮らしの調和」の項で四谷の千枚田が掲載されているのでご覧ください。
新しい広報誌の誌面は県Webサイトで、動画はYouTubeに公開。